

海外の話題

15 年ぶりの中国駐在

農林中央金庫 北京駐在員事務所長 平山 勝英

本年 7 月に当地に着任し半年ほどが経過した。中国農業銀行との第 4 期目の交換留学生として当地で語学・実務研修をさせて頂いたのが 1995 年から 96 年にかけてであったため、約 15 年ぶりの赴任である。研修当時は 1 人民元あたり 15 円前後であったと記憶している対円での為替レートが 15 年を経過した現在でも 12~13 円程度となっている点を除けば、月並みながらその後の変化には目を見張るものがある。「(2008 年の) 北京オリンピック前後の変化が非常に大きかった」と当時から駐在されている先人たちが異口同音に述べているが、オフィス街に林立する高層ビル群、(例外もないではないものの) 小奇麗な服装をした地元買い物客で賑わう大規模ショッピング・モールの数々、あまり見かけなくなった自転車通勤姿と反比例するように増えた車の数およびその結果もたらされる朝夕毎日繰り返される大渋滞、等々、まさに枚挙に暇がないほどである。

先般某県の系統団体の方々に当事務所にお越し頂き甚だ僭越ながら中国マクロ経済状況について簡単にご説明させて頂く機会を得た。その際に以前に筆者が北京に暮らした 95 年当時と 09 年の各種経済統計の日中比較についても触れたが、躍進する中国と、今ひとつ成長軌道に回復できないわが国の違いが歴然として現れている。名目 GDP に関して言えば、95 年では中国が 7,010 億ドルであったのに対し、日本は 5.3 兆ドルであり 7 倍以上の規模であった。一方、09 年は中国が 4.9 兆ドルで 95 年の約 7 倍、日本も 1 割程度拡大はしているものの 5.7 兆ドルにとどまっている。(なお、1 月 20 日に公表された中国の 2010 年の名目 GDP は 5.9 兆ドルで、2 月に公表される予定の日本を追い抜くことが確実視されている。) 毎年のように 2 桁またはそれに近い数字の経済成長率を達成してきた中国と「失われた 20 年」状態から今ひとつ脱しきれないわが国の状況を勘案すれば当然ではあるが、やはり愕然とさせられる変化である。無論、総人口が約 10 倍、国土面積が約 25 倍の隣国と国全体の経済規模で比較をすること自体にはそれほど意味があるとも思えず、95 年から 09 年までにやはり約 7 倍に増えた一人当たり GDP はそれでも 3,700 ドル程度であり、一部の富裕層を除けば国民一人一人の生活の豊かさと言う意味でわが国が圧倒的に優位な立場にあることは言うまでもない。「和諧社会」の実現という国家的スローガンの裏側にある(許容範囲を超えたともみられる水準まで拡大した) 貧富の格差をはじめとして中国には克服すべき課題も多く、リーマンショック後も含めて高度経済成長を続けていることのみをもって「中国は素晴らしい。それに比べて日本は…」などと語るべきではないことは言うまでもない。

筆者自身、これまでアジアに関する業務を比較的多く経験させて頂いてきたものの、「中国」についてはまだまだ学ぶべきことが多いことを日々痛感させられている。9 月の尖閣諸島問題発生以降数ヶ月を経たものの、両国関係については未だに微妙な緊張感が漂う状況にあるが、農林中央金庫並びに系統の数少ない中国拠点のひとつとして、過度に中国ポジティブでもなく、と言って批判的なスタンスに偏向することもなく、極力中立的な立場での情報発信を、在任期間中継続していきたいと気持ちを新たにしている。